2021年５月
初夏号
第 204 号

飛鳥 かわら版
ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人　永野　正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話　088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp

1993 年、「飛鳥誕生パーティー」の打ち上げ写真。
「四国写植」から「飛鳥」へ、新しい出発の日です。

今年の５月、飛鳥は創業 50 年となりました。
半世紀の来し方を振り返ると、
なんと沢山の方々に支えていただいたか、
アルバムを見ながら改めて感謝の思いをいっぱいにしています。

飛鳥創業50年 …… 2～3
〝おむすび〟のやさしさ ……松﨑淳子 4
キルギスタンからコンニチハ ㉚ ……氏原名美 5
新聞余話⑭ ……大澤重人 6
おのころじま奮染記 22 ……田島征彦 7
いろいろかいろ三 ……安藝眞一 8
出版文化賞受賞 …… 9
お手軽に書籍を作りませんか？ …… 9
わが家の太郎 ㊶ ……永野雅子 10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

50th ANNIVERSARY

2021年5月

飛鳥は創業50年を迎えました

針木東町の旧社屋。社名は「有限会社四国写植」でした。

▲ 1985年　初出勤の日、玄関前で勢揃い

1981年　四国写植10周年記念

社長の隣が正将現社長、時の流れを感じます。

▲ 1986年
自分史作り方教室開催

大勢の参加者に私たちもびっくり！

▲ 1989年　「愛すべき酔っぱらいに捧ぐ」（森岡雅子著）が、テレビの東芝日曜劇場でドラマ化。

高知でロケ。四国写植の名前が全国に報道されました。（お母さん役の長山藍子さんと）

夏のお楽しみ　ビアガーデン。

▲ 1993年　有限会社飛鳥に社名変更

お祝いに、大阪の㈱モリサワ様がお宝のモリサワコレクションを高知で披露してくださいました。杉田玄白の「解体新書」原本や、数々の貴重な文献などが大きく報道されました。

ソフトウェア団地落成祝賀餅まき。

▲ 1998年　株式会社に組織変更。
本宮町のソフトウェア団地に待望の新社屋完成。

引っ越し前の新社屋で社員とともに祝の宴。

◀ 2010年８月
社長逝去

四国写植から飛鳥へ、業界の変革を見越して常に時代を先取りし、導いてきた和宏社長、あまりにも急な旅立ちに言葉もありませんでした。
社長、50年を迎えることが出来ました。これからも見守ってください。

▲ 2009年　針木浄水場でお花見。

創業50年を迎えて

２０２１年５月、株式会社飛鳥は創業50年を迎えることができました。これも一重に長年に亘ってご支援、ご指導を賜った皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

１９７１年、先代、永野和宏が実家である永野写真製版所から独立し、母と二人三脚で始めた写真植字業、８年後の１９７９年に〝有限会社　四国写植〟を設立し企業として歩み出し、様々な苦労を重ねてきたようです。

印刷機の動く音、インキの匂い、常に両親や従業員の働く姿を見て育ってきたため、この仕事自体が私の生活リズムに染み込んでいることは間違いありません。

１９８６年には飛鳥出版室を開設し「自分史」を始め、また業界の変革に対応するため、父は先駆け的に「Ｍａｃｉｎｔｏｓｈ」のパソコンを導入したと聞いています。

とにかく技術屋の父の「品質へのこだわり」は尋常ではなかったようで、いい仕事をするためには採算度外視ということも多々あり、母は資金繰りに奔走したそうです。

１９９３年、社名を「飛鳥」に変更、数年後に「飛鳥」という社名にした経緯を聞いたときは父の先見の明に脱帽しました。１９９８年には株式会社へと改組、現在の本宮町へ移転しました。

この移転の直後に私は飛鳥に入社し、２０１０年、父の急逝により代表取締役に就任、今日に至っております。

私が関わったのは半世紀という歴史のほんの一部です。この50年の間、数え切れないほどの多くの皆様のお支えと、従業員のお陰でここまでやってこられたことに改めて心よりの感謝と敬意を表したいと思います。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

株式会社　飛鳥
代表取締役　永野　正将

〝おむすび〟のやさしさ

松﨑　淳子

私たちのくらしに〝おむすび〟っていう、白いご飯に食塩をちょっぴりつけて握り固めたメニューがあります。

昭和の初め、幼かった頃、夕刻におなかが空いて、台所で夕食を作っている母の足元で「おなか、空いた」とも言わずにグズグズしていたら、母がご飯を小さく握って1個、「ホラ、そっちで」と。それで機嫌が直ったりして。あの頃は〝おにぎり〟言いよりましたね。

そして、小学校の遠足。お昼のお弁当に〝おにぎり〟持参の人も。歩いて歩いて空いたおなかに塩味のきいた〝おにぎり〟は格別！

ジャポニカ米って冷えても結構おいしいから、〝おすし〟にもしたけど、おすしはハレの顔で、簡単な〝おにぎり〟は日常の助け舟でしたね。

それから戦争の時代に、そして、20歳からは平和を願う地球となって、今、95歳の私。コロナで外出が減り、庭の木にいやされている時、来し方の風景を思い出す。何故か〝おにぎり〟のことを。

昭和30年、市内の上町（当時の町名は金子橋）から、ここ九反田へ嫁に来た私。ここ松﨑家のお墓は、小石木山の南に続く皿ヶ嶺の頂きにあります。山番さんの家が小石木山の入口にあって、墓の管理、掃除などは代金を払って受けてもらいました。

が、代替わりで引き受ける人は居なくなりました。

だから、春秋のお彼岸、夏のお盆と祀り、お参りをするのには、掃除も家族で、となりました。広い墓地の草刈りからとなると、嫁入り先からも手伝いに来てもらうことに。そこで、お供え物のほかに必ず〝おむすび〟と〝茹で卵〟を持参して、第二幕は〝ピクニック〟に。

皿ヶ嶺の頂上からの眺めは抜群！　北の山脈、高知市街の街並みと、昼食会もなかなかにイケル。孫たちは「おむすびが楽しみ！」って。という次第で、〝おむすび〟と〝墓参り〟は切れないご縁に。これはズーッと我が家の習いとなっています。

また、緊急時に〝おむすび〟が役立ったことも。

今は亡き、女学校の同級生。彼女は、私がここ九反田に嫁してきた時には、すぐ近くに夫君と子供2人の家庭を持っていて、共働きの私はずい分と扶けてもらいました。ある日のこと、そのご夫君がなんと、交通事故。急逝！

混乱し、人の出入りは激しく、時は容赦なく過ぎる中、通夜、そして葬儀と、大変！　いつ、誰が、どれだけそこに居るのか、さっぱりわからない。おなかも空いてくる。

そこで、両家の炊飯器で炊いたご飯を〝おむすび〟にして大皿に並べ、行き帰りに卓上に手をのばせるようにした。お茶もそばに置いて。

お弁当注文では数がわからないし、座って食べる場所も必要。これは大ヒット！　みんなが満足してくれましたね。

ある日、印刷・出版会社〝飛鳥〟での編集の日、若い社長が、「おむすびが懐かしい！」って。あゝそうね。この社長が若かった頃からここ飛鳥に出入りしてきた私。昔は専ら〝おむすび〟だったのよね。あの頃は亡きお父様が社長だった。優しい方だった。

また、定年の心祝にと集まった家族の夕食会。孫娘の晴可が立ち上がってねぎらいの挨拶を贈られた中で〝おむすび、美味しかった〟と。

〝おむすび〟って暮らしに優しいメロディを送り込んでいるってわけね。大切な食文化ですよね。

キルギスタンからコンニチハ ⑧⓪

村境が国境になって～キルギス－タジク住民対立

氏原名美

うじはら・なみ
越知町出身。北海道大学卒。キルギス共和国ビシケク国立大学（旧称ビシケク人文大学）教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

大型連休初日、「バトケン州でタジキスタンと軍事衝突」というニュースが飛び込んできた。キルギス南西部の州バトケンは、一九九九年の「バトケン事件」以後、外務省危険度情報の三つ目のレベル、「渡航中止勧告」となった地域だ。北部にはフェルガナ盆地が広がる。四月二十九日、州内にあるタジキスタンの飛び地付近で給水施設をめぐる争いが激化、タジク軍が砲撃開始、キルギス側も応戦、子供も含め死者は三十名を超え、負傷者百八十以上、焼失家屋多数、キルギス住民二万七千人が避難する事態となった。

＊＊＊

フェルガナ地方はもともとウズベク人もタジク人もキルギス人も入り混じって暮らす地理的にも経済的にも一体性を持っていた土地だ。それがソビエト政府の国境画定で三国に分割された。ソ連邦という一つの国家に組み込まれていたあいだは人々の往来にも物品の移動にも支障はなかったし、小競り合いもすぐに鎮圧された。しかし、政権末期は制御が効かなくなり各国は次々独立、国境問題を残したままソ連邦は崩壊してしまった。

そのフェルガナの、キルギスとタジキスタンを分ける国境線は、地図では実態が把握できない。国境標石も緩衝地帯もなく、モザイク模様のようにキルギス集落とタジク集落が入り組んでいて、タジク人が住んでいる家だからタジキスタン、キルギス人が越してきたからキルギス領、とするものだから個人の地所も国家の領土も境界が頻繁に変わり、向こう三軒両隣が外国だったりする。

かつては同じ村落の住人、争いが起こってもその都度隣人としての話し合いで収めてきたのが、国を異にした途端、物を売り買いすれば密輸になるし水や農地をめぐる小競り合いは国境紛争となる。二〇一九年には両国首脳が事態を収めるため国境地帯に出かけるような騒動が起きた。

＊＊＊

今回はさらに情勢が緊迫している。しかも、キルギスは就任から間もない外交手腕が未知数の大統領、タジキスタンのラフモン政権は支持率低下という内憂をかかえ国民の関心を外患に向けたがっている。最悪のシナリオが想定された。しかし、両者はすぐさま緊張緩和策を協議し、軍の即刻撤収を決め、近隣諸国の介入を回避した。

首都ビシケクの中央広場には「タジク人と戦え！」と扇動する者たちが現れたが、これ以上人命が失われることがないよう、市民は平和的な解決を望み、政府代表団は国境地帯で和平交渉を続けた。学生たちの間では、負傷者、住居を失った人、避難した人々への救援物資の提供を呼びかける動きが始まった。

そして、五月六日、「国境に関するキルギス共和国とタジキスタンの共同声明」が発表され、「両国は、兄弟愛に満ちた民族の古い歴史に鑑み、相互理解と信頼の精神に基づき、現存するすべての国境問題を解決する用意がある」と両国政府が宣言、ウズベキスタンとカザフスタン、それにロシアまでが仲介を申し出ていたが、当事国だけで事態を収めることができた。今後は、両国民ともに納得できる方法を模索しながら、国境の画定と集落の区画整理を進めていくことになるだろう。

だが、このまま落ち着くか、肉親を殺され家を焼かれた人々の気持ちを考えると不安は残る。

＊＊＊

外出自粛の中での大型連休、キルギスや英米、ロシアのニュースサイトを覗いて過ごした。報道写真を見ると、事態収拾のテーブルを挟んで対峙する双方の政府代表団の、誰一人としてマスクをした者がいない。負の遺産に翻弄される国々にとって、国境問題はコロナ禍より深刻なのだ。　了

キルギス情勢概説資料（在キルギス日本国大使館）
https://www.kg.emb-japan.go.jp/files/100131588.pdf

新聞余話 ⑭　大澤 重人

夕刊の寿命

夕刊・主見出し「元慰安婦らの訴え退ける」。

朝刊・主見出し「元慰安婦らの請求却下」。

あれっ？　同じ記事が載っているぞ。最近よくあります。

「同じ記事を載せてはならない」

新聞社の編集者時代に先輩から口を酸っぱくして言われました。同僚が目立たないベタ（一段見出し）記事を誤って重複掲載した際にも「おわび」を出しました。それが、今は昔です。

夕刊があるのは、全国紙の大阪本社で言えば、大阪や京都、兵庫の南部など近畿の中心部です。高知をはじめ、残りの多くの地域は、朝刊のみの統合地区と呼ばれます。

私が新聞社を退職する際、朝刊は12～14版、夕刊は3、4版体制でした。数字が大きいほど締め切りが遅くなります。京都や神戸などの地域に配る夕刊は3版、朝刊は13版です。大阪市周辺が4版と14版で、地域的に呼応しています。

2021年4月22日(木)

元慰安婦らの請求却下
韓国地裁「主権免除 認める」

元慰安婦らの訴え退ける
韓国地裁 1月と判断分かれる

脇見出しこそやや異なるものの、内容も、扱い（３段）もほぼ同じ記事。上が朝日新聞の2021年４月22日付朝刊、下が同21日付夕刊

たとえば、ゴルフの松山英樹選手がマスターズで優勝というニュースが夕刊3版で飛び込んだとします。次の夕刊4版、統合地区の朝刊12版とその記事を載せ、次の13版では記事を外します。3版と重複するからです。読み落とした人がいるかも知れないから、もう一度載せようという考え方はしません。読者が全ての記事を読んでいるという大前提で紙面を作っているからです。

■以前と今の新聞の記事制作例

		【以前】	【今】
夕刊	3版	松山優勝	松山優勝
	4版	松山優勝	松山優勝
朝刊	12版	松山優勝	松山優勝
	13版（3版と同地域）	記事を落とす	松山優勝
	14版（4版と同地域）	記事を落とす	松山優勝

重複　重複

そのため、編集者は全ての記事に目を通し、どの記事が何版から載ったか、朝刊や翌日の夕刊担当に引き継ぎます。同じ記事でも、大事故で死者が増えるなど、情報の中身が更新されたら、その内容も引き継ぎます。うっかり間違えた版次を書き、先輩に大目玉を食らったことがあります。それほど大切なものでした。

しかし、今、重複厳禁のルールが守られていません。なぜでしょうか。夕刊が要らないという読者が相当数出てきたからです。情報源として新聞は必要だが、家計は抑えたい。じゃあ、夕刊をやめて、少しでも購読料を浮かそう。そう考える人が半数ほど出てきているのです。松山選手の優勝の記事を夕刊だけで外すと、朝刊しか取っていない読者はその記事を読むことができません（ここでは、続報記事が載ることはないと仮定します）。だから、重要な記事の場合、ほとんど同じ記事を二回載せるようになっているのです。

しかし、それは朝夕刊を両方取っている読者の目にどう映るのでしょうか。新聞社も気にしていて、新しい情報を加えたり、見出しを工夫したりしますが、それでもダブリ感は否めません。

夕刊発行には、取材部門のデスクや編集者が朝からスタンバイして、印刷工場にも要員が必要です。こうした経費が重荷になると、高知新聞のように夕刊をやめようという判断になるのです。実際に地方紙だけでなく、全国紙の一部地域など、夕刊をやめる新聞社が相次いでいます。

新聞社も夕刊のあり方を試行錯誤し、読み物路線などを試みてはいますが、まだ正解は見つかっていません。読者離れが進み、新聞経営も厳しい昨今、正解が見つかる前に、日本の新聞から夕刊が姿を消す日が来るかもしれません。

＝渡来人歴史館（大津市）専門員、元毎日新聞高知支局長

おのころじま沈没大舊記

ふんせんき

田島征彦

22. テレビ体操

小学校へ入学する前の夜、父がぼくら兄弟に体操の特訓をした。茶の間の畳の上で「背中を真直ぐ伸ばせ！」と厳しかった。父は体育の教師で、運動神経のにぶい息子をたたき直して、学校に上げたかったのか。しかし、あまりに、どんくさいのでサジを投げたようだった。特訓は一回だけで終った。

体操は学校教育の間、ぼくを悩ませた。美大を出て、結婚して、京都の丹波の山奥で自給自足の生活を始めて、ラジオ体操にまた出会った。

当時、住んでいた古い農家の茶の間の柱に有線放送の受信器がとり付けてあり、朝昼夕と民謡風音楽をバックに、ラジオ体操が流れた。中年にさしかかって、健康が気になり始めた頃だったので、音楽に合せて、ラジオ体操を始めた。ぼくは自分に不得手なことでも決めたことは、けっこう実行する方なので、体操は欠かさず日課となってしまった。

淡路島へ引越して、老年になると、早起きになった。夏は暑い淡路島も、西海岸の冬は厳しい。茶の間を床暖房にした。朝早く起き始めて、テレビで6時25分から10分間の体操の時間を知った。早朝の体操は、身体に良い。毎朝のテレビ体操にはまってしまった。

ところが、妻のヒデコも釣られて早く起き出して来るが、2匹の猫と毛布にくるまって床暖で、二度寝を楽しむ。

茶の間いっぱいに、毛布やかけぶとんが敷きつめてあり、体操する足元が、おぼつかない。

テレビの若いきれいなスタイルの女性の動きに合わせて、80の老人がよろけながらも奮闘しているとと、ヒデコの気持良さそうなイビキは、ピアノの伴奏に妙に合っているのだ。

ぼくのテレビ体操は決して快適とはいえない。

たじま・ゆきひこ（染色家・絵本作家）
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖縄戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本を制作中。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

いろいろかいろ

その三十

夏の音

安藝眞一

一枚の葉書が、下宿に届いた。返し見ると、横型に文字と絵がつゞられて、左手に大きく、たっぷりと鳴子の見取図。中心に塗られた朱色は赤インクで木端の切り口は、お手のものの、すずりの墨色で、ていねいに色を重ねている。目につくは鳴子の打ち板一枚に黄色の板が一つ。この色だけは父のまわりにある色でなく、ポスターカラーか、水彩絵具かを求めて、文房具店に走ったのか。その黄色が朱塗りの板に映えて、灯がともったような、ゆらぎを、木口の黒が闇色に、さゝえている。文章を見ると、「……この夏、高知の街でよさこい祭というのをはじめる。ついては踊りの手拍子に鳴子を持つことになり、制作を頼まれたので、ここに描いて見た。かたちと色の合わせ、これでいかがか」とある。板のかたちもよく、色の組合せは、いかにも江戸の色で、歌舞伎の舞台を見るようだった。

返事を書いた。「型も色も、これで完成しています。特に朱色と黒の組み合わせがよく、漆で仕上げると、よいものになるでしょう。この黄色がポイントになっています。このまま変えずに制作をして下さい。よろしく」今から六十六年前の昭和二十九年の初夏のことである。

父からの便りは初めてだった。返事を書いたのも初めてのこと。美大に入試を決めた時、高校の担任も校長も反対で、美術部の先生のみが賛成。家の内外も甲乙分かれ、親類の教授の取りなしで、やっと母も折れ受験が決まった。父からは何の意見も出なかった。又こちらも、それほどの相談もしなかったが、どうにか合格して今、下宿で父からの相談の葉書を受けとって見ると、口には出さないが、どこかで許してくれていることのあかしかと、少し胸が熱くなった。今も思い出す。あの時の葉書の筆使いと色の重なり。あの一枚を手元に残しておくべきだったと過ぎる年の早さと重なりを思い出すだけである。

夏休みに入って帰高した街は、祭りを待つように日射しがまぶしい。百貨店も新しく出来て、人の行き来も増え、輝かしい日常が続いていた。よさこい鳴子は、原案通りに仕上っていた。総うるし塗りの鳴子に、紫の房をつけて、出を待つ。やがて八月九日の晴天を迎え、新しいゆかたを着て、父は踊りの列に入る。第一回の所為か、街は思いがけない人々の渦となり、街のあちこちで鳴子の音と歓声が沸きあがる。当時は地方車などは皆無であったが、太鼓と笛と、三味線だけで祭りらしく音がはじけ、二日間かけて、踊る父の姿を撮影にかけまわった。

祭りは続いた。二回、三回、やがて十回を越え踊りのチームも増え重なり、全国からの参加者が、年追って増えつゞけた。

鳴子の制作は忙しかった。家業の漆器店から家具会社へと仕事は変ったが、父は独りで鳴子の組立てに没頭した。来る日も来る日も店の屋根裏の一隅に座り、鳴子の部品に囲まれて組立てを続け、夜明けから陽の昏れるまで槌を打ち続けた。組立てについての苦楽を何一つ話さなかった。他の手によって組立てを拡大する事もなく、ただ一人が造りつゞける気概がこもって、鳴子以外の外の声を聴くこともなかった。組立てを続けた朝夕が十五年程つゞいた頃に病を得て、槌の音が絶え、残された大量の鳴子はいつの間にか街に流れて、踊り子連の手の中に渡りつくし、やがて来る祭りの日を、待つ季節に移っていく。

来週は桜が咲くという知らせの三月の朝、花の気配も知らずに、父は逝った。出棺の日、冷たくなった父の胸の上に、最後に組み立てた鳴子一組、拝み合わせにして重ねて置く。

朱塗りの板がカタリと鳴った。

了

あき・しんいち／高知市

おもかげの昭和へ（小林勝利著）出版文化賞を受賞

2021年2月20日（土）
於　高知会館

2020年度「出版文化賞」に小林勝利氏の「おもかげの昭和へ」（飛鳥出版室）が選ばれました。

授賞式には常務と川田部長が出席し、小林さんご一家とともに、受賞を喜び合いました。

お手軽に書籍を作りませんか？

お手軽書籍（小部数限定）料金表

特別料金のため、決められた仕様になります。
仕様に沿わない場合は別途お見積もりとなります。

四六判（縦 188mm× 横 127mm）／ **B6判**（縦 182mm× 横 128mm）

頁数＼冊数	50 冊	100 冊	200 冊	300 冊
50 頁	76,000 円	85,000 円	98,000 円	109,800 円
100 頁	126,000 円	137,000 円	153,000 円	169,000 円
150 頁	169,500 円	182,000 円	202,000 円	220,000 円
200 頁	207,500 円	222,000 円	245,800 円	267,000 円
250 頁	243,000 円	259,000 円	288,000 円	312,000 円

A5判（縦 210mm× 横 148mm）

頁数＼冊数	50 冊	100 冊	200 冊	300 冊
50 頁	80,000 円	89,000 円	105,200 円	118,800 円
100 頁	135,000 円	145,000 円	168,000 円	186,000 円
150 頁	182,500 円	197,000 円	224,000 円	247,800 円
200 頁	225,000 円	243,000 円	274,000 円	304,500 円
250 頁	265,000 円	287,000 円	326,000 円	357,000 円

※表紙や本文の用紙変更やカバーを付けることも出来ます。（別途御見積もり）
※基本的に部数は最低50冊からになります。上記以外の頁数、部数はご相談ください。

サンプル本も準備していますので、是非ご来社いただきご覧ください。

ASKA CREATIVE
株式会社 飛鳥 ／ 飛鳥出版室 〒780-0945 高知市本宮町 65-6【担当：川田】
Tel.088-850-0588　Fax.088-850-0599

わが家の太郎 51

限界

永野　雅子

夜中の2時、4時、太郎の大きな鳴き声が聞こえる。いつものことながら、

「もう！　いいかげんにして！」

とつぶやきながら急いで階下へ。お隣の塀の下でこれでもかと言わんばかりの声を張り上げている。家の中に入れて閉め込むと今度は大暴れ。カリカリの入った皿や水入れを蹴飛ばしてくるくる回り始める。部屋は餌が散乱し、床は水浸し。

「太郎、太郎」と呼びかけながら顎や背中を撫でるが

「放っといてくれ」といわんばかりの勢いで大立ち回り。こうなったら安定剤を飲ますしかない。

その薬もこの頃は2時間ほどしか効き目がなくて、夜中に何度も起きるはめに。

お医者様に相談すると、

「薬に対する抗体ができるので、別の方法を探しましょう」

と、漢方薬などを出してくださるけれど、それもまた同じこと。こうなると、ご近所にも申し訳なくて、今更「すみません」の言葉も出ない。

ある日、お隣の奥さんが

「永野さん、野菜を沢山頂いたからどうぞ」

と、声をかけてくださった。

「ありがとう。いつもやかましゅうてすみません」

「気にせんでいいよ。うちの犬も同じ。太郎ちゃん元気やねえ。近所も皆、わかっちゅうわね。」

涙が出そうになった。本来なら

「どうにかして！」

と言われても仕方がないのに、多分太郎が鳴くたびに目が覚めるだろうに…。

私などこの頃は、太郎に長生きしてとは言えない心境なのに、皆さんの心の広さにただただ感謝しかない。

太郎にも
こんな時が
ありました！

かと言って、夏に向かい窓を開ける季節にこのままではいけないと、息子が防音室を作った。小さいものでは動けなくて太郎のストレスになるからと、遮音マットにダンボールを挟み、ベニヤ板で囲って大奮闘。

室内？　には動きによって点灯する照明、外出先からもチェックできるようにカメラまで備えてある。

完成した防音室で薬を飲んでグーグー眠る太郎。

さて、今夜は朝まで眠らせてくれるでしょうか？

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役